２１世紀の日本のかたち（２４）

景観基本軸　－　東京の姿形について考える（その６）

戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

１．景観基本軸

東京都は全国に先駆けて、都全域をカバーする東京都景観計画を策定しています。

計画の前提に「東京都景観づくり基本方針」をつくり、**「自然を生かす」「歴史と文化を伝え、生かす」「地域の個性や多様な魅力を育てる」**を掲げています。

そしてこの景観計画の柱の一つに「景観基本軸」を設定し、これをテコに東京の景観向上をめざすというものです。

景観基本軸はまず**「自然を生かす」**につながっており、東京都の存立している自然の地理的特徴をベースにして定められています。

１）下町水網軸
２）隅田川軸
３）南北崖線軸
４）都心東西軸
５）臨海軸
６）玉川上水、神田川軸
７）多摩川、国分寺崖線軸
８）武蔵野軸
９）丘陵軸
10）山岳軸
11）島嶼軸

この中で、隅田川、玉川上水、神田川などの水系河川沿いの軸や、国分寺、南北などの崖線は文字通り軸というにふさわしいのですが、他は下町水網、臨海なども含めて、軸というより基本面という方が実態と合致しているかもしれません。

いずれにしろ、これら景観基本軸は、市民が日常生活を営んでいる家や近隣などの小景観と、大東京成立のバックグラウンドである関東平野の地理、地形、遠望、ないし俯瞰としての大景観のあり様とを計画的につなぐ役割をもつものです。

図１　景観基本軸設定

（東京都景観基本計画　2009年4月改定版）

２．玉川上水、神田川景観基本軸

玉川上水、神田川（神田上水）は江戸時代、江戸100万住民の命を支える水でした。

玉川上水は多摩川の上流、羽村から取水し、武

蔵野台地の地理、地形を巧みに読み取ってほぼ平坦な地面を延々約11里（約43km）、江戸の西の入口、四谷大木戸まで導水したのでした。

図２　玉川上水の分水概略図（1715～1718年頃）

（東京都水道歴史館資料より）

玉川上水は、都市側に水を供給しただけではなく、これに直行するいくつもの分水路をつくり、多摩地域の農業の発展をも支えました。玉川上水の一部は今も水道施設として利用されていますが、利根川の水が東京に導かれ、淀橋浄水場の閉鎖（昭和40年）に伴って、玉川上水は小平監視所から下流の通水が一時止められました。

この事態に対し市民運動もあり、近年、下流にも清流が復活し、また最近は四谷大木戸のあった新宿御苑の北側に、新宿区によって玉川水路・内藤新宿分水路（500m）が平成23年に再現されることになっております。

写真１　初冬の玉川上水　羽村堰付近

（平成21年12月９日戸沼撮影）

玉川上水は地形を解読する測量、導水路建設の近世日本における優れた土木遺産です。これを主導したと伝えられている庄右衛門・清右衛門の玉川兄弟の銅像が玉川上水の出発点、羽村の堰に今も建っています。玉川上水は両岸の堤に樹林を育て、これが茫漠とした武蔵野台地に画かれた鮮やかな水と緑の帯として市民の恰好な散策路にもなっているのです。

神田川も玉川上水とともに東京都の重要な景観基本軸です。神田上水が江戸の水道として使われ始めたのは、玉川上水よりも早くのことでした。今の小石川から神田の川筋に導水されたものです。神田の水で産湯につかったとは江戸っ子の自慢のようでした。

東京の市街地が拡大し、近代水道が普及して明治34年（1901年）に神田川上水は廃止になりました。大正12年（1923年）関東大地震後、神田川周辺への人口集積、急速な中小工場の集積、戦後の高度経済成長と、都市側からの圧力が神田川に集中し、生活排水、工場排水で水質は汚染されました。加えて治水機能が求められ、急ごしらえのコンクリートの直立護岸で神田川の景観は不様になってしまいました。

この川の治水、水質改善がなされ、親水が議論され部分的に河川景観が整えられ出したのは最近のことです。神田川は都市に深く切り込んだ峡谷のような景観もあり、流域は多様な顔をもっています。

写真２　神田川　聖橋を望む

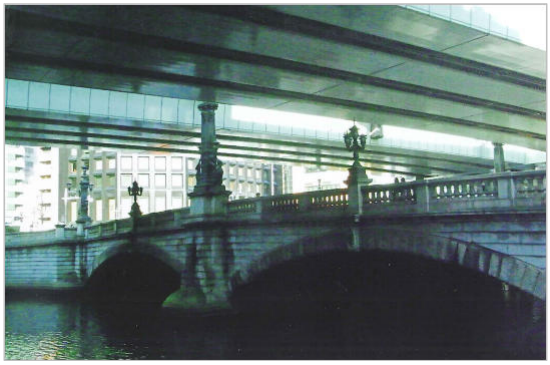
（平成21年12月８日戸沼撮影）

玉川上水とともに神田川は、東京の東西を横つ

なぎするオープンスペースであり、小動物の棲む水と緑の生態回廊（エコロジカル・コリドール）として貴重な財産であるとの認識が広がってきました。川を都市の裏側としない景観づくりが求められています。

神田川とつながる日本橋川も江戸からの歴史をもつ貴重な水路です。日本橋は全国への江戸の起点として特別な空間です。橋と川を押さえつけている高速道路が取り払われて、ここに空を取り戻すことができれば、よほど首都東京らしい景観が甦ると思うのですが。

写真３　高速道路の下の日本橋



（平成21年12月８日戸沼撮影）

３．隅田川景観基本軸

隅田川は、セーヌ川が花の都パリを、テムズ川が重厚なロンドンを体現している様に、江戸・東京の歴史を体現して流れています。

浜離宮から築地の魚市場を横目に、海風を背に船に乗ってゆっくりと隅田川を北上すると、新旧の街並みが次々とパースペクティブに見えてきます。

正面にはいくつもの橋 ― 勝鬨橋、佃大橋、中央大橋、永代橋、清洲橋、両国橋、蔵前橋、厩橋、駒形橋と思い思いのデザインを見せ、近づいては後に退いてゆきます。昨日は永代橋あたりで建設途中の東京スカイツリーが顔を出しているのが見えました。

写真４　永代橋の向こうに建設中の東京スカイツリー

（平成21年12月４日戸沼撮影）

吾妻橋の橋詰で降りて浅草寺にお参りするのは、外国からの客が来たときの私の東京案内コースの定番です。築地の朝の魚市場も人気があります。庭園、公園好きには向島百花園にも案内するのですが、江戸の骨董商人が造った愛らしいこの庭は、四季折々に草花の風情を見せます。

春、隅田川は両岸に桜が満開です。夏は花火です。江戸時代の隅田川の花火は、江戸庶民の夏の楽しみでしたが、今年の夏の隅田川の花火も多くの都民が外国からの観光客ともどもこれを楽しんでおりました。

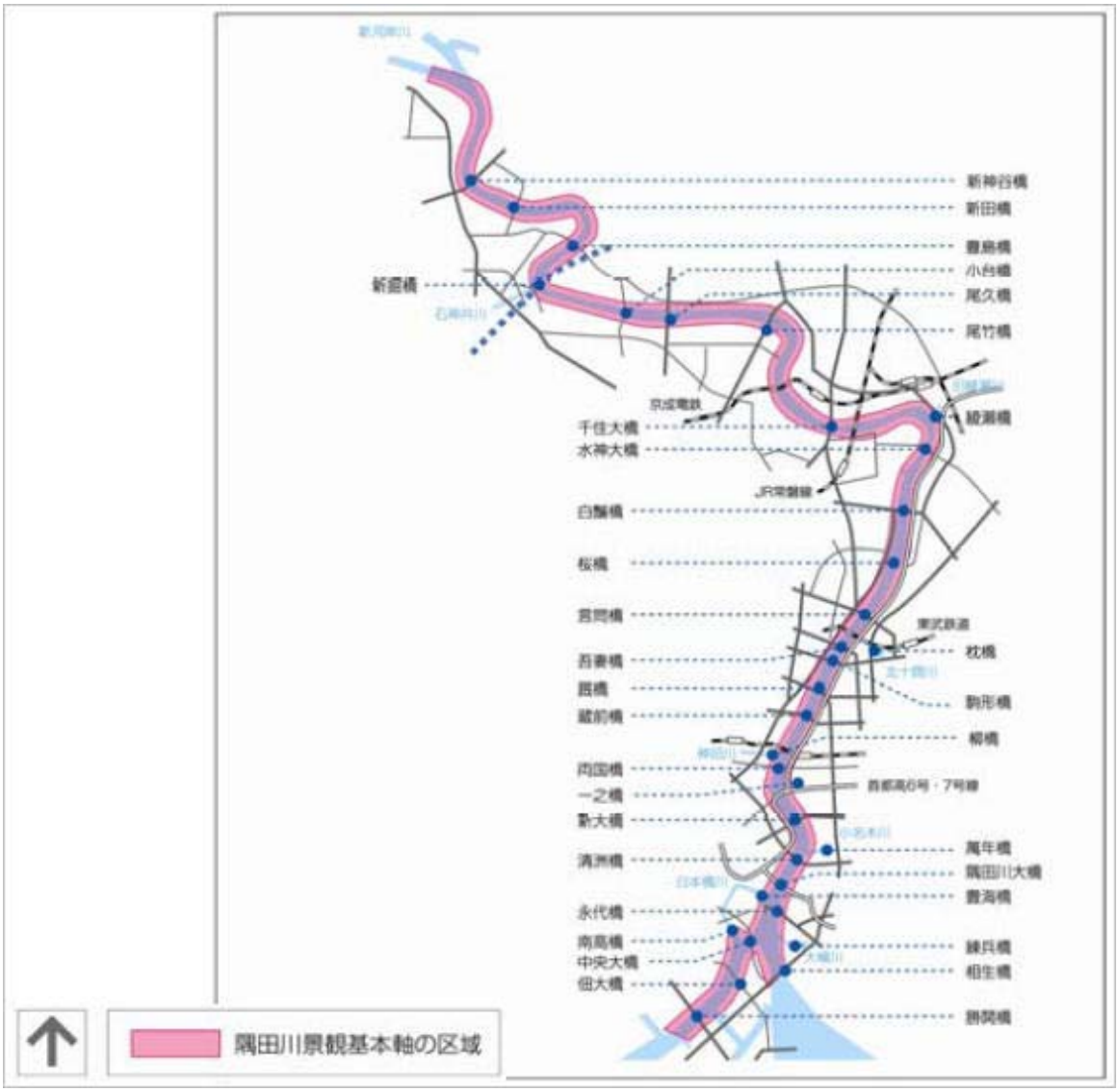
隅田川の両岸には佃島、箱崎、浜町、両国、浅草、向島、千住などが在り、江戸時代から続く歴史、文化が凝縮しています。山の手と異なる文化がいまだ色濃く感じられるのです。

隅田川には悲しい歴史も秘められており、関東大地震災や先の戦災では火に追いつめられてここに飛び込んだ死者の悲しみの川でもありました。この地域のまちづくり**「歴史と文化を伝え生かす」**という景観づくりには重い記憶もあるのです。

戦後の一時期、両岸に工場が立ち並び、川が汚染され、魚も棲まなくなったこともありましたが、ようやく東京の川として復活しつつあります。

隅田川は東京湾にそそぐ20kmに及ぶ一級河川であり、海風、河風を運んで、夏場の東京のヒートアイランド化を抑えるのに大いに役立っています。

図３　隅田川景観基本軸



（東京都景観基本計画　2009年４月改定版）

隅田川景観軸の指定の範囲は両岸の外側へ50mの範囲となっています。江戸時代、この川は航路でもあり、まちの顔は川に向いておりました。これを受け取って川からの景観を大事にすべしと都の景観計画ではうたっていますが、これは大事な視点と思われます。

景観基本軸は他に、都心部に南北崖線軸、東西に国分寺崖線軸が指定されていますが、これらは概していえば斜面緑地の連続帯です。

これは東京の地形に微妙に起伏があることを示すもので、これにつながる小景観が多様で豊かな緑と重なっていることに大きく関わっています。

この崖線には湧き水もあり、コンクリート砂漠化した東京に、水と緑のオアシスをつくりだしています。そして小動物もいる都市のエコロジカルコリドールです。

他の景観基本軸、ないしは景観基本面も歴史的な遺産を抱えつつ、それぞれに特有な景観資源をもち、小景観をつなげ、中景観としてこれらを束

ねています。これら景観基本軸はいくつもの市区を貫いており、都、市、区が充分に協議しつつ工夫を凝らした施策が期待されます。

先年、国により景観法が制定され、全国のいくつもの自治体が景観団体になっていますが、東京都の内部でも世田谷区、新宿区、足立区などがそれぞれ景観団体になり、独自の景観計画を策定しはじめました。

私も都・区のいくつかの景観計画に参画しておりますが、市民参加の景観づくりを通して**「地域の個性や多様な魅力」**を育ててほしいものです。

(2009.12.15)

参考資料　1.「東京都景観計画－美しく風格のある東京の再生」（東京都）2009年4月改訂
2.「ＵＥＤレポート2009 秋号」（財団法人日本開発構想研究所）2009年11月